

Hello

2002

3

No.225

friends

KANAGAWA
INTERNATIONAL
ASSOCIATION
NEWSLETTER

———神奈川県国際交流協会は、ことし創立25周年です。———

(財)神奈川県国際交流協会 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ(あーど 352) 1階 ☎045-896-2626

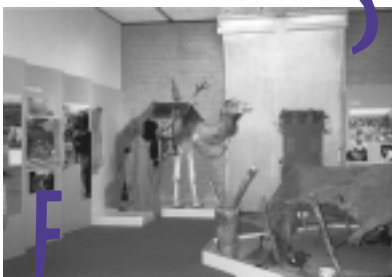
M

ミュージアムが学校にやってくる!

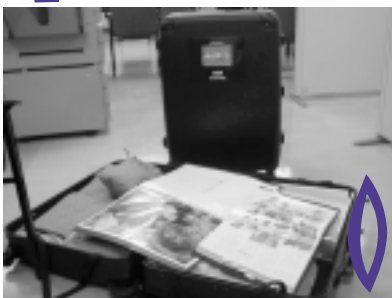
～「博学連携」による国際理解教育の展開～



Museonの外観 ©中村絵乃



「サヘル」の生活」展示品 ©中村絵乃



「みんぱく」の外観と内蔵資料



「みんぱく」ガイドの一部

子どもたちが、興味深そうにトランクを覗きこんでいる。中には、ニジェール（アフリカ）の民族衣装や生活用具がぎっしり。トランクの中のモノを取り出し、子ども達に説明を始めたのは、デン・ハーグ市（オランダ）の博物館から派遣された学芸員である。ハーグ市立教育博物館では、国際理解教育の一環として、博物館の収蔵資料をトランクに詰めて学校に貸し出すアウトリーチ活動（注1）を長年続けている。

この「アフリカ・トランク」と呼ばれる貸出キットを使った事前学習が終わると、次は、子どもたちが博物館を訪れ、展示を使った様々なワークショップを体験をする。さらに、学校へ帰った子どもたちは、自分たちが興味を持った課題を追究するための事後学習に取り組む。このように、学校と連携した教育プログラムを実践している博物館は、オランダには数多くある。本誌196号で紹介したオランダ王立熱帯博物館こども館も、その一つである（Hello friend No.196参照）。

日本の教育現場でも、「総合的な学習の時間」と「完全学校5日制」の導入を目前に控え、博物館と学校の連携を目指した実験的なプロジェクトが始まっている。中でも、大阪の国立民族学博物館（注2）が2年前から取り組んでいる「みんぱく」事業と、神奈川県立地球市民かながわプラザの展示と学校を結ぶ貸出キットを開発中の「スーツケース総合学習教材開発研究会」の活動は、国際理解分野における「博学連携」の代表例と言ってよい。

ここで「博学連携」とは耳慣れない言葉だが、「博物館と学校の連携」を意味し、生涯学習の分野では、ここ数年急速に使用頻度が増えている言葉である。文部科学省も、こうした博学連携の動きを支援するため、数年前より「親しむ博物館づくり事業」を開始した。子どもの教育は、学校だけでなく、博物館等の生涯学習施設を含めた地域全体で考える時代が訪れているのである。

本特集では、日本各地で始まりつつある博学連携の動きのうち、国際理解の分野にしぼって事例を紹介し、今後の博学連携による国際理解教育の展開の可能性について考えてみたい。

(注1) アウトリーチとは、様々な理由から学習文化施設に来館できない人々のために、これらの人々に対して教育サービスを届ける活動を指す。博物館の場合は、キットの貸出や移動博物館、学芸員の出前授業などがアウトリーチの代表的な活動である。最近では、アウトリーチの意義を、学習権の保障という観点に加え、利用者開発という側面からとらえる考え方が有力になってきている。

(注2) 国立民族学博物館は、国立大学の共同研究機関であり、神奈川県立地球市民かながわプラザは、神奈川県・県民部所管の学習文化施設である。いずれも博物館法上の博物館ではないが、展示機能を持つ施設として、ここでは博物館という呼称を用いることにする。

子どもとともにつくる総合学習

— 博学連携を生かして —

東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校 中山京子

「総合的な学習の時間」が来年度から小中学校で実施される。最近の学校関係の研究会はこの「総合的な学習の時間」をどうつくるかという点に話題が集中している。地域の特徴を生かしたもの、環境・福祉・国際・情報といった現代的な諸課題に視点をあてたもの、子どもの興味関心に基づいた組み立てをしているものなど、様々な実践が取り組まれている。どのようにその学校の総合学習を性格づけるかという点については、それぞれの学校がこれから議論を深めていくことになるが、共通していることは学びの場がこれまでの「教室」を飛び出そうとしていることでもある。総合学習を展開するにあたって、地域の人材や施設との連携が模索されたり、地域と関わって課題を追究したり、子どもの探究心に応えるために学校外に出かけたりしている。だから今こそ博物館と学校の連携（＝博学連携）は新しい学びの場をつくる可能性を秘めていると言える。これまで博物館は学びの場であったし、博物館に学びの場を求めることはあった。

しかし、この博学連携における学びの場づくりは、一方的な学習材の提供や求め（資料提供や単発的な見学など）ではなく、本当に子どもが探究しようとしていることに応えるために、博物館スタッフと学校教員が共通理解を図りながら学びの場を構成していくことを意味している。

以下に示す総合学習の実践「ワールドカルチャー」は、子どもが願うことから活動を立ち上げ、その実現のために博物館（地球市民がなわプラザ（以下プラザと略す）・国立民族学博物館「みんぱく」）（民族のテーマごとにバックされた学習材）と連携して活動を展開し



ていった小学校4年生の事例である。まず、教師が課題を先に示すのではなく、子どもとどんなことをしたいと願っているのか話し合うことから始めた。そこで出されたことは、ダンス、いろんな楽器の演奏、民族衣装のファッションショー、劇、サンバなどであった。これらの願いを叶えるためにはどうしたらよいか、皆で考えた結果が、世界の国々について興味ある視点で調べ、それらを劇と展示に表現するという方法であった。そして、子どもたちは探究を始めるが、子どもが理解できる範囲の文字情報の少なさと実物と出会えないことの壁にぶつかった。

そこで教師から子どもの学びを支援するために、博物館という視点を子どもに示した。子どもの探究の様子を見守りつつ、博物館と事前に連絡をとりながら、どんな博学連携が可能か考え、学びの場をつくる。ただし、安易に博物館と連携をして活動をすすめるのではなく、あくまでも子ども主体の活動ベースを待ちつつ、適切な時期に学びの場を拡大させた。この実践で、活動が立ち上がってからプラザの見学まで3ヶ月かかっているのはこの理由による。そしてプラザで実物を通して探究を深めた子どもは、自分の最終的なテーマを設定し、劇に向けて取り組むことになる。そこで、劇表現やそれを補足するための展示に使用したいものや情報を得るために「みんぱく」を活用した。

子どもたちは、これまでの探究をもとに台本を仕上げ、劇づくりに取り組んだ。ひたむきに取り組むその姿から、時間をかけ子どもの求めにあった学びの場づくりの成果を感じる。（活動の流れや教師の支援についての詳細は次頁に示す。）

「学校を出て博物館へ」

～オランダ・ミュゼオン（教育博物館）の教育プログラム～

湯本 浩之（開発教育協議会）

観光でオランダを訪れる日本人は少なくない。そのお目当ても十人十色ではあろうが、とりわけ西洋絵画の愛好家にとっては、オランダを旅程から外すわけにはいきまい。愛好家ならずとも、レンブラント、ゴッホ、フェルメール、モンドリアンなどオランダが誇るいわば「世界遺産」級の珠玉の絵画には、やはり機会を見つけて出会っておきたいものである。

さて、オランダ第3の都市であるデン・ハーグの中央駅から市内バスに乗って約15分。オランダ近代絵画を代表するモンドリアンの世界最大のコレクションで知られるハーグ市立美術館に、その博物館は隣接している。ミュゼオン（Museon）の愛称で親しまれているこの博物館の正式名称は、オランダ語で「Museum voor het Onderwijs」。直訳すれば「教育博物館（Museum for Education）」である。

展示フロアは1階と2階に分かれており、1階は特別展示用のスペースの他、図書室やカフェテリアがあり、2階が常設展示用のフロアとなっている。ざっと一回りしてみると、案内書にある通り、地質学、生物・生態学、科学技術、歴史・考古学、文化人類学の5つをテーマとした自然科学博物館のようである。

しかし、この博物館を「教育博物館」たらしめているものは、何と言ってもそのプログラムである。Museonでは現在、小学生向けの初等教育プログラムとして37のコースと、中高生向けの中等教育プログラムとして21のコースが用意されている。そして、Museonのスタッフ（教員免許をもった学芸員）が学校と連携協力しながら、これらのコースが実施されている。また、2階のフロアは18の展示室に区切られており、それぞれの展示室で各関連コースの講義やワークショップが受けられるようになっている。

たとえば、小学校低学年を対象とした「アフリカ旅行」というコースでは、まず最初にMuseonのスタッフが学校を訪問して、導入のためのワークショップを実施する。この時、スタッフはニジェールの日用品や衣服などが中に入った箱（「アフリカ・トランク」）を持参し、子どもたちにニジェールという国の生活や文化などに親しんでもらうプログラムを提供する。また、子どもたち一人ひとりに配られる学習キットの中には「パスポート」が入っており、ア

フリカ旅行を疑似体験するための演出も図られている。

こうした事前学習を学校で受けてから、子どもたちはMuseonにやってくる。入口では「パスポート」にスタンプが押され、いよいよアフリカ入国となる。「サヘル生活」と題された常設展示室が即座にワークショップ・ルームとなり、展示品を使った「ハンズ・オン（hands-on）」な参加型学習が展開されるという仕組みになっている。そして、子どもたちは学校へ戻り、アフリカに関する課題学習を深めていく。

このような博物館と連動した教育プログラムには、開発教育や環境教育などの視点が取り入れられたものも少なくなく、オランダでは多くの学校で採用されている。Museonに限らず、アムステルダム市の熱帯博物館やこれに併設された「こども博物館」もその一例である。オランダでは一般の美術館や博物館でも、入口に子ども用のワークブックが置かれているところが多く、また、館内には授業の一環で訪れた生徒たちの姿が目立つことも多い。

Museonの前身となった「教育恩恵協会（Association for the Benefit of Education）」の設立は1904年。今から約100年も前に学校と博物館とを結びつけた「教育プログラム」が構想され、その実践の場としてこの教育博物館が生まれた背景には、20世紀初頭に導入された実践的・実証的な教育理念の伝統がオランダの教育界にあることが指摘できる。近年でもオランダの教育系政府機関が「学校を出て博物館へ」というキャンペーンを展開するなど、博物館を活用した教育プログラムが進められているのも特色といえるだろう。

教育改革の柱として、この4月から「総合的な学習の時間」が正式に導入される。日本でも、学校と博物館との連携協力による新しい「学びの場」が生まれたいことを期待したい。

<参考ウェブサイト>

Museon（教育博物館）<http://www.museon.nl>

Tropenmuseum（熱帯博物館）<http://www.kit.nl/tropenmuseum/>

Kindermuseum（子ども博物館）<http://www.kit.nl/kindermuseum/>

小学校4年生総合学習「ワールドカルチャー」

—博物館を活用して—

<活動のねらい>・仲間と願いを重ねて活動をつくりあげる楽しさを味わう。・興味を持ったことについてじっくり追究し、その成果を展示や劇を通して表現する。・多文化にふれてその多様性を知り、それらを尊重する姿勢をもつ。

立ち上げる

<教師の支援>

子どもが願いを重ねあう時間をとる。子どもの言葉を聞きながら、子どもがもっているイメージを具現化するための教師の支援として、博物館との連携の視点からヒントを出す。

追究する

■調べる

これまでの子どもの経験に基づく追究方法から出発し、追究の深まりに応じて、追究方法や範囲を広げるための支援を段階的にする。

■行動する

活字資料に子どもの視点が留まっていることから、人やものとかかわろうとする視点を積極的に取り上げる。

■出会う・体験する

単発的な博物館見学ではなく、事前に博物館職員と個々の子どもの手紙のやり取りの場を設け、打ち合わせも繰り返し行い、子どもの追究を支えられるような環境作りをする。見学後も継続して活動の支援を得られるよう、事後のかかわりも継続する。

直接的な出会いや体験から膨らむ新しい追究の視点や興味関心を大切にする。

■テーマを絞る

表現する

■仲間とつくる

仲間とつくりあげる過程を保障する。音楽専科教諭とのTTを組むなど、子どもができる範囲、やりたい範囲に即した支援をする。

■味わう

<子どもの意識・活動の姿>

9月下旬

2学期にみんなでしたいことを話し合おう

(このクラスのオリジナル、みんなの願いがかなうこと)

10/4

みんながやりたいこと(ダンス、楽器、民族衣装のファッションショー、劇、サンバ、など)を実現させるためにはどうしたらよいか。どうしたら調べられるか。

10/9

調べてみたことを報告します。調べたことを生かして、発表ができそうだ。

10/11

これからの計画をたてよう(10月資料集め、11月自分たちがしたいこと、12月地球市民かながわプラザの見学、1月国立民族学博物館から「みんぱっく」をかりる、2月発表)

10/17

調べてきたことを話します。

家にあるものを探してみた

10/26

調べてきたことを話します。

大使館に聞いてみました

11/15

調べてきたことを話します。

11/22

みんなが今興味を持って進めていることは。

・興味ある国 ・民族衣装 ・民族楽器

・プラザやみんぱっくで何がわかるかな。

・プラザに質問の手紙を書こう。

12/3

家の近くでワールドカルチャーを探したよ

人に聞いたり実物で調べられないかな。

親子でつくるワールドカルチャーマップ

ワールドカルチャーマップを作ろう

12/5

ようこそグンさん タイの踊りを教えて

12/7

ナシルさん パキスタンのことを教えて

12/11

地球市民かながわプラザに調べに行こう!



12/12

プラザの感想話し合い

12/14

ワールドカルチャーの発表に向けてどうしたらいいか。

展示発表と劇の発表を組み合わせれば、調べたことを生かしてみんなの願いがかなう!

1/9

物語作り(グループ)(国語)

1/15,16,

物語作り(国語)・展示づくり

17,18

物語づくりをどうすすめるか 物語を台本にしてみよう 台本の手直しをしよう

1/21

音楽をつくろう 楽器はあるかな どうしたらその国の音楽ができるかな

地球市民かながわプラザに相談してみよう

2月上旬

展示づくり 劇づくり

2/16,18

舞台上で発表しよう

2/19,20

思い出を綴ろう

日米の博物館との連携を生かした 国際理解教育のプログラム開発と実践

森茂岳雄（中央大学）
中山京子（東京学芸大学附属世田谷小学校）

2000年は、沖縄からのハワイ移民100周年にあたり、ロサンゼルスにある全米日系人博物館(Japanese American National Museum)の巡回展示「弁当からミックスプレートへ—多文化ハワイの日系人—」が、沖縄県立博物館で開催され、翌2001年には大阪の国立民族学博物館においても開催された。本年は5月24日から6月23日まで広島県立美術館で開催される予定である。

この巡回展示のタイトル「弁当からミックスプレートへ」は多文化社会ハワイに生きた日系移民の文化や経験の象徴である。ハワイでは、プランテーションに従事するために集まってきたさまざまな国からの移民の交流によって、歴史的に独自の文化が形成された。とくに、食文化はその象徴的な事例である。主にサトウキビのプランテーションに従事した初期の日本人移民は、毎日の昼食に下段ご飯、上段に漬け物などの簡単なおかずの入った二段重ねのアルミ製の弁当箱を持参した。

プランテーションで働く労働者には、ハワイの先住民に加えさまざまな国からの移民も多く、彼らは共に昼食をとる間に自然にお互いに持ち寄った食べ物を交換し合うようになった。例えば、フィリピンのパンシット麺、ポルトガルのチョリソー・ソーセージ、プエルトリコのバステレ・ポーク、中国のチョイサム（キャベツ料理）、朝鮮半島のカルビー、琉球のアンダギ・ドーナッツ、そしてハワイ先住民のロミロミ（魚料理）などである。やがてこれらの経験が、さまざまな国や地域の郷土料理を一つの皿に盛りつけた「ミックスプレート」と呼ばれるハワイ特有の食文化を誕生させた。このような食文化の融合は現在まで受け継がれており、ミックスプレートはハワイ料理のレストランにおいて代表的なメニューの一つになっている。

このミックスプレートは、まさに今日の多文化社会ハワイの象徴表現である。すなわち、ハワイでは、様々の国からの移民が持ち込んできた文化や価値観と先住民やアメリカ本土のそれらが接触、変容して新しい独自の文化（ローカル・カルチャー）が生まれた。

本展示では、移民当初から第二次世界大戦期の強制収容等の苦難の経験を経て今日のローカル・カルチャーが生まれるまでの日系人の歩みを、実物、写真、ビデオ、などの展示を通して紹介している。

そこで、日米の両博物館及び周辺の学校、児童館等と連携・協力して、その展示を活用して、日系アメリカ移民の歴史的経験やハワイにおける多文化共生の現状についての理解を深め、今後多文化化の進展が予想される日本における多文化共生について共感的に考える学習プログラムの開発と実践を行った。その際、展示を主催する全米日系人博物館と展示内容、授業や活動で活用可能な資料や指導計画について一年をかけて意見交換をし、館内での体験活動やそれに使用する具体的な教材の開発を行った。また、具体的なプログラムの実施に当たっては、展示を開催した日本の博物館、実際に活動を実施する学校や児童館、団体とそのつと綿密な協議を行い、実施した。実践の概要は以下の表の通りである。

学びの場としての博物館の持つ意義は、何と言っても展示物であるモノや映像のもつ力であり、そこにおける体験的学びの可能性である。例えば本展示についていえば、子どもたちにとって遠いハワイに移民した人たちの苦労（移民の歴史的経験）やそれらの人々がハワイで他の文化と接触することによって生み出された新しい文化（文化変容、多文化共生）について、文字や言葉による概念的学びには限界がある。モノや映像は、それら抽象的なメッセージを具体的に示してくれる。またそこでの「体験」は、子どもたちの感性に訴え、好奇心や探求心を刺激し、学ぶ楽しさを啓発してくれる。

今日、2002年度からの「総合的な学習の時間」の開始を控え、多くの博物館が来館者の参加・体験的な学びを強く意識するようになってきている。そのような中で、子どもの学びの場の拡大という意味からも博物館のもつ意味は大きい。

博物館	対 象	日 時	活動名・単元名	内 容
沖縄県立博物館	那覇市立大名児童館 小学生7名、中学生7名	2000年 12月2日	博物館探検に出かけよう	●「ハナハナウエアを着てみよう」 ●活動（ミニブック作成、Q&Aカード作成、フォトアクティビティ、世界に広がるウチナーンチュマップ作成、ハワイのいろいろな言葉調べなど）●「紙芝居を見よう」
	那覇市立城東小学校6年生 （4学級）	2000年 11月17日～ 12月5日	世界に広がるウチナーンチュ（総合的学習）	●日系移民についての調べ活動 （移民とは何か、なぜ移民をしたのか） ●博物館見学 ●新聞づくり・紙芝居づくり ●学級内発表会 ●学年発表会
国立民族学博物館	大阪府茨木市立三島中学校 2年生	2001年 6月～10月	大阪再発見人権ウォーク（総合的学習）	●人権総合学習の一環としての取り組み ●事前授業（6月1日）●博物館見学（6月7日） ●まとめの作品作り・発表（6・7月） ●文化祭での展示発表（10月）
	和歌山県高等学校国際教育研究会（中高生26名、留学生3名、*ALT3名、教員9名） * assistant language teacher	2001年 7月31日	第5回和歌山県国際教育セミナー	●博物館見学（活動とグループディスカッションなど） ●講義 ●ミニレポート

●国立民族学博物館の貸し出し教材：「みんぱっく」

国立民族学博物館では、学校等への貸し出し用資料教材の開発を行っている。この教材は「みんぱっく」と名付けられ、まだ試行段階ではあるが、すでに小・中・高等学校6校が、この貸出キットを使った授業を実施している。国立民族学博物館（以下「民博」と表記）が、こうした事業に取り組み始めたのは2年前。初年度に、先行事例や学校のニーズ調査を行い、昨年夏に、現在の「みんぱっく」としての形がほぼ整った。

現行の「みんぱっく」は、インドネシア、ペルー、アラブ、インド、ブータン、イヌイットの6種類で、貸出キットの中には、民族衣装・楽器などの実物資料のほか、モノにまつわる様々な情報を詰め込んだティーチャーズ・バックが含まれている。6種類のうち、すべてに共通するのは民族衣装のみで、他の実物資料については、そのバックを担当した研究者の関心によって異なっている。例えば、「みんぱっく」ブータン版には、通学鞆や教科書等の学校生活に関わる資料が入っており、インドネシア版には、衣装のほか楽器や人形芝居用の人形などが入っている。ティーチャーズ・バックには、「コンセプト・シート」、「テーマ・シート」などが含まれており、バックを活用するうえで参考になる。

これまで「みんぱっく」の開発は、民博非常勤研究員の佐藤優香さん、民博の民族学者、デザイナーを含む展示業者らが連携しながら進めてきた。今年度より、開発にかかわる人達や、関心を持つ人たちが、ともに語り合う場として「みんぱっく 厨房」という名の研究会を開始した。上記の佐藤さんは、「みんぱっくで扱われているモノは、教師にとっても普段目にしないようなものばかりなので、教師と児童生徒がともに探求するための道具になるといいなと思います。また、教師同士が授業のデザインについて考えたり語ったりするきっかけにもなるといいですね。『みんぱっく』を使うことで、いろんな人やものがつながることを望んでいます。『みんぱっく 厨房』も、そうした思いを形にしたもののひとつです」と語っている。

4月から本格実施される「総合的な学習の時間」を目前に控え、「みんぱっく」の利用を希望する学校が増えることが予想される。現在民博では、こうした学校の期待に応えるため、貸出を円滑に行うための具体的な仕組みづくりを進めているところである。



「みんぱっく」ペルー版の内容



「みんぱっく」ペルー版に含まれる衣装

●スーツケース総合学習教材開発研究会

スーツケース総合学習教材開発研究会（以下「スー研」と表記）は、1998年から活動が続けている「Children's Museum研究会」のメンバーが中心となり、2000年9月に発足した。構成員は、教育学を専門とする大学教員、小学校教員、博物館プランナー、国際交流財団職員など。メンバー全員が、博物館のアウトリーチ活動に関心をもっていたことから、博物館と学校をつなぐスーツケース教材（貸出キット）の開発を研究テーマとすることになった。幸い、研究会活動を始めるにあたり、神奈川県立地球市民かながわプラザ（以下「プラザ」と表記）の協力・支援を得ることができたため、研究テーマを「食」を切り口とした国際理解に定め、プラザの展示を活用したスーツケース教材を開発することになった。

「スー研」では、上記の貸出キットをプラザのアウトリーチ教材として活用することを前提に、以下の4点を考慮しながら研究を進めている。

- ・学習プログラムの中に展示の見学を入れる。
- ・地球市民かながわプラザの展示に関連するもの。
- ・神奈川としての地域性を考慮する。
- ・対象年齢は、小学校の中学年から高学年。

なお、研究会代表の小笠原・日大教授によれば、「スー研」は、実物資料を館外に貸し出す従来型の「キット」という枠を超え、総合学習等での活用方法についても提案することを目指しているという。こうした開発コンセプトを実現させるため、スーツケース教材の中には、アジアの食器等の実物資料のほか、教師用カリキュラム&リソース・ガイド、児童図書、教師用参考図書、学習支援資料（VTR・CD）、ワークシート、香辛料セットなど、総合学習を展開するうえで必要となることが予想される関連資料が豊富に盛り込まれている。博物館展示と学校をつなぐツールとしての利用にとどまらず、子どもたちが総合学習を創るうえでの学習材としての活用も期待したい。

4月からは、プラザの学校連携プログラムの一環として、スーツケース教材の整備・検討に着手することが決まっている。これまで実験的に行われてきた「スー研」の活動は、研究開発の期間を経て、これから現場での試行段階に入ることになる。スーツケース教材が、今後の国際理解教育の中で、どう生かされていくのか。将来の発展が楽しみである。

教師用ガイド

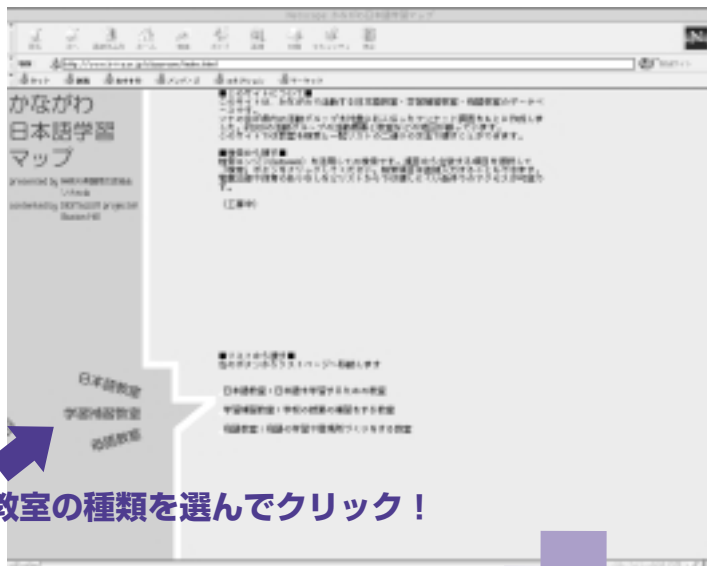


Curriculum & Resource Guide

スーツケース教材の教師用ガイド

WEB版「かながわ日本語学習マップ」を 活用してください！！

www.k-i-a.or.jp/classroom



協会では、県内で活動する日本語教室、学習補習教室、母語教室など、約200の教室のデータが手軽に見られるWEB版「かながわ日本語学習マップ」を作りました。このマップは、かながわのNGOのひとつ「ソナの会」（在住外国人のための日本語にかかわる情報交換を目的としたネットワーク）が作成した冊子「かながわ日本語教室マップ」をもとにインターネット上で誰でもアクセスできるように協会が加工したものです。在住外国人への情報提供や、活動グループ相互の情報交換のために多くのみなさんに活用していただければ幸いです。

特徴1：日本語教室だけでなく、外国人児童・生徒のための学習補習教室と母語教室のデータが掲載されている

特徴2：電車の沿線や保育サービスの有無など、リストからは探しにくい条件の検索もできる

特徴3：市町村別に分類されているので、使いやすい

特徴4：マップが見やすい

特徴5：インターネットだから、いつでもどこでも教室の情報を得られる

特徴6：情報の更新が簡単なので、いつも新しい情報を入手できる



地域と教室名を
選んでクリック！



■各教室のみなさんへのご協力をお願い■

情報は新鮮さがいのちです。このサイトを活用する方々が最新の情報を手にすることができるように活動グループや教室の活動する曜日、時間、連絡先などに変更が生じた場合には、速やかに協会まで、TEL・FAX・e-mailなどでご連絡ください。

春期英会話講座 受講者募集

世界のこと、日本のこと、日常生活のことなどを、より多くの人たちと話せるようになることを目標に、英会話講座を開講します。神奈川県友好姉妹州の米国メリーランド州から招へいた専任講師が講座を担当します。楽しい雰囲気の中で英会話を学びませんか。

★申込み受付日時★

昼クラス希望の方 3月23日(土) 午前10時

夜クラス希望の方 3月23日(土) 午後2時

クラス分けのための簡単なテストを行ないますので、電話予約のうえ、上記日時にお越し下さい。筆記用具と受講料をご持参下さい。申込み受付にはテストの時間を含めて約2時間かかります。

※申込み希望者が各クラスの定員を超えた場合は抽選となります。定員に満たない場合は、随時追加受付を行ないますので3月24日以降にお問合せください。

対象：18歳以上の方

定員：各クラス17名

(秋期英会話講座の継続受講者を含みます)

費用：受講料 39,900円

(消費税込み、教材費は含みません)

協会年会費 3,000円(会員の方は不要)

※費用は申込み時に一括でお支払いいただきます。

また、教材費(3,000円程度)を申込み時にご持参ください。お支払いいただいた費用は、払い戻しできませんのでご了承ください。

会場：神奈川県国際交流協会・研修室

(JR根岸線「本郷台」駅徒歩3分・あーすぶらざ1階)

★講座内容★

講師：Ms.Mary Elizabeth Nitsch

(メリーランド州から招へいた専任講師)

期間：4月3日～8月3日(週1回、全18回)

*授業は祝日も実施

★クラス★

Aクラス(上級)

社会時事全般を題材にした話し合いが中心の応用会話クラス

Bクラス(中級)

英語で日常の簡単な受け答えができる方の日常実用会話上達クラス

Cクラス(初級)

英語を学習したことはあるが、はじめからやり直したい方むけの初級会話クラス

★講座日程★

	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
昼のクラス 13:00～15:00	Cクラス	Bクラス	Aクラス	Aクラス
夜のクラス 18:30～20:00	Bクラス	Aクラス	Cクラス	

問合せ：企画情報課(E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp)

★講師紹介★

メアリー・エリザベス・ニッチ(愛称 メンディ)

ジョージア州サバンナ生まれ。大学院で英語を母語としない人への英語教授法を学び、大学では人文学を専攻。現在は、2000年9月から当協会の英会話講師。英語指導歴として、米国国務省の派遣によるドミニカ共和国文化研究所で英語教授研究員、ボルチモアやエクアドルでの公立中学校での英語教師など。日本の温泉に興味があり、食べることと音楽が大好きな、周りの人を元気づけてくれる明るい先生です。

春の語学講座 入門～初級Ⅱ 受講者募集!

中南米のスペイン語 ・入門講座

対象 スペイン語を初めて学ぶ方
期間 5月9日～7月25日
曜日 木曜日
時間 14:00～15:30
講師 角田マリさん
(ボリビア出身)

ハングル講座・初級Ⅱ

対象 ハングル文字が読め、簡単な会話ができる方
期間 4月11日～7月18日
曜日 木曜日(但し、毎月第4木曜日を除く)
時間 18:30～20:00
講師 金 順玉さん(横浜コリアン文化研究会代表、フェリス学院大学非常勤講師)

インドネシア語講座 ・初級Ⅱ

対象 インドネシア語の語順を知っている方
期間 4月9日～7月2日
曜日 火曜日(但し、4月30日を除く)
時間 18:30～20:00
講師 美野幸枝さん(アジア・アフリカ語学院講師)

■3つの講座に共通する事項■

講義数 全12回(週1回、90分)

費用 受講料 26,250円

(別途、テキスト代2,000円程度が必要になります)

協会年会費 3,000円(会員の場合は不要)

教室 あーすぶらざ 1階・研修室B
(JR根岸線「本郷台」駅徒歩3分)

定員 15名(申込み先着順)

※但し、受講希望者が7名に満たない場合は、講座を実施せず、お支払いいただいた代金の払い戻しをいたしますので、ご了承ください。

申込み電話 (045-896-2626)

ファックス (045-896-2945)

eメール (kikaku@k-i-a.or.jp)

のいずれかで、神奈川県国際交流協会の語学講座担当者宛てに、

①希望講座、②お名前、③ご住所、④連絡先(電話、ファックス、メールアドレス)をお知らせください。

●各事業に関するお問い合わせは、
(財)神奈川県国際交流協会
☎045-896-2626 までどうぞ。